

保育における空想上の存在との出会い体験

—実践の展開と工夫・配慮—

富田 昌平*

Experience of encountering fantasy figures in nursery schools

In this study, we explore how play (i.e., imaginary exploration play) and seasonal events (i.e., Christmas and Setsubun), in which fantasy figures appear, are carried out in the nursery. We conducted a questionnaire survey. The subjects were divided into areas with many reports of imaginative adventure play practices (85 schools in expanded areas) and areas with few reports (51 schools in non-expanded areas), and the implementation and methods of each practice were investigated. The main findings are summarized as follows: (1) Although imaginative adventure play was conducted in 27% of all nursery schools, it was more common in expanded areas (39%) than in non-expanded areas (8%). (2) Christmas- and Setsubun-related events were held at most nursery schools, and when these events were not held, it was for religious or educational reasons. (3) In imaginative adventure play, less than half of the schools had fantasy figures dressed as adults. However, at Christmas and Setsubun, most schools had fantasy figures (i.e., Santa Claus and Oni) dressed as adults. (4) When Santa Claus dressed as an adult appeared, it was manipulated to make the child believe that it was genuine so as not to destroy the image of the child. However, when Oni dressed as an adult appeared, it was manipulated to make children aware that it was not genuine, in order to avoid giving them excessive fear and anxiety.

[Key Words] Fantasy figures, Imaginative adventure play, Santa Claus, Oni, Nursery schools.

問題と目的

想像的なものを信じることは、幼児期の想像力(imagination)の発達において不可欠な要素である。幼児期に子どもは家庭や幼稚園・保育園での生活において、サンタクロースや節分の鬼をはじめ様々な空想上の存在(fantasy figure)との出会いを体験する。しかし、それらは現実に存在しないため、日常生活の中で直接に観察できないか、あるいは仮に(大人の扮装や精巧な作り物によって)観察できたとしてもめったに観察することができない。ゆえに、子どもは残された物理的証拠や他者の証言などを手がかりとして、最終的には自らの想像力を頼りにその存在やプロセス

を思い描き、その存在を支持するもってもらいたい説明を自らの中に紡ぎ出す必要がある。想像力研究の第一人者であるHarris(2000)は、想像力は私たちが独特な人間たらしめるものであり、革新や創造、発見の基礎となるものであると述べたうえで、子どもは文化的な神話に参加する時、可能性について考える能力を発揮すると述べている。従って、文化的な神話に参加すること、すなわち、空想上の存在との直接的または間接的な出会いを体験することは、子どもの想像力を豊かに育むうえで重要な意味があると考えられる。

幼児期における空想上の存在との出会い体験のうち、恐らく最も代表的なものは、先に述べたサンタクロースと節分の鬼であろう。家庭はもちろんのこと保育の現場においても、子どもはクリスマスと節分という年中行事を通してこれらの存在

* 三重大学

を経験する。クリスマスの日が近づくと、子どもは保育者とともにクリスマス・ソングを歌い、ツリーやリースで室内を装飾し、プレゼントを入れるための靴下を用意して、サンタクロースの訪問を心待ちにする。また、節分の日が近づくと、子どもは保育者とともに鬼のお面をつくって豆まきの遊びをしたり、豆を煎ったり、邪気除けの柊鮒を飾り、鬼の襲来に備えたりする。

他方、そうした年中行事以外でも、子どもは日々の遊びや生活の中で様々な形で空想上の存在との出会いを経験する。その代表的なものに、「想像的探険遊び」(藤野、2008)と呼ばれる遊びがある。これは、保育者が子どもに内緒で空想上の存在(鬼、忍者、竜、河童、お化けなど)の実現可能性を示唆するような仕掛けを用意し、探険に対する興味や推論の楽しさを喚起しながら、保育者自身も子どもと同じ立場でその過程を共有していくという形態をとる遊びであり、岩附・河崎(1987)による保育実践書『エルマーになった子どもたち』の発刊以来、保育の現場で広く親しまれている遊びの1つである。

こうした空想上の存在が登場する遊び・活動や年中行事は、子どもにおいて身近な世界に対する想像力や好奇心・探究心を掻き立て、その発達を促す効果が期待できるにもかかわらず、実際、それらが保育の現場においてどの程度行われ、どのような工夫や配慮のもと、どのように展開されているのかについては、富田(2018)の研究を除いて、明らかにされてこなかった。

富田(2018)は、岩附・河崎(1987)によるエルマー実践以来、想像的探険遊びが保育の現場においてどのように受け入れられ、どのように発展してきたかを探るために、保育雑誌等に掲載された実践報告の量の経年的推移や内容的特徴及び傾向を分析した。その結果、想像的探険遊びの実践報告は、1990年代から2000年代前半にかけて順調にその数を増やし、当初はまだ珍しかったこの種の遊びも、2000年代後半以降になると保育の中でよく知られた遊びの1つとなり、実践報告の中で

も、子ども個人やクラス集団の成長を支える保育方法の1つとして描かれることが多くなったことを明らかにしている。加えて、想像的探険遊びの地域性や主題性、対象年齢などの特徴や傾向についても明らかにしている。

しかし、富田(2018)の研究では、あくまでも保育雑誌等に掲載された実践報告が分析対象であり、ある意味ではそうした遊び・活動の発達の及び実践的な意義に賛同した園のみを対象として取り上げたに過ぎないとも言える。また、取り上げたのは遊び・活動のみであり、空想上の存在が登場する年中行事については検討がなされていない。従って、空想上の存在が登場するこの種の遊び・活動や年中行事が、実際のところ、保育現場においてどの程度行われ、どのような工夫や配慮のもと、どのように展開されているのかについては十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、保育現場における空想上の存在が登場する遊び・活動や園内行事の実施状況や方法について、質問紙調査によって明らかにする。それにより、園生活において子どもの想像力を豊かに育む土壌がどのようにつくられており、実践を進めていくうえでどのような工夫や配慮が考えられるかを考察する。併せて、富田(2018)において想像的探険遊びの実践報告が多かった地域と少なかった地域とで実施し、両者の比較も行う。これは、地域によって想像的探険遊びの浸透度にどのような違いがあるのかを探るためであり、併せて、保育雑誌等での実践報告を分析資料とした調査結果が、保育現場の実態をどの程度反映しているかを探るためである。

なお、本研究では、保育現場を主たる調査対象とするが、先に述べたように、空想上の存在との出会い体験は家庭においても盛んに行われている。例えば、家庭でクリスマスの行事を祝ったり、サンタクロースを子どもが信じるように奨励したりすることは、90%以上の家庭で行われており(e.g., Anderson & Prentice, 1994; Goldstein & Woolley, 2016; 富田, 2014)、節分の行事を祝う

ことも同様に高い割合で確認されている（山田・橋本、2019）。また、その他にも欧米では、子どもの歯が抜けるとその抜けた歯を銀貨と交換してくれる歯の妖精の存在や、復活祭に色鮮やかな卵やキャンディを子どもの元に届けてくれるイースター・バニーの存在など、様々な空想上の存在との出会い体験が家庭内で行われ、奨励されている（e.g., Clark, 1995; Prentice, Manosevitz, & Hubbs, 1978）。従って、本調査は保育現場を対象としたものではあるものの、そこで得られる知見は、各家庭において空想上の存在との出会い体験をどのように実践し、その体験を通して子どもの想像力をどのように育てていくかを考えるうえで、一助となるに違いない。

方法

調査協力園

富田（2018）をもとに、想像的探険遊びの実践報告が多い地域としてA県、それらの実践報告が少ない地域としてB県を抽出し、その中から各4市の公立・私立の保育園を対象とした。なお、A県とB県は人口規模や分布が似通った県であり、県庁所在地がいずれも県内最大の都市ではないという点でも共通していた。抽出された4市は県内で人口の最も多い上位4市であり、いずれも人口規模は約10万～30万であった。また、保育園のみを対象とし、幼稚園と認定こども園を対象に含めなかった理由は、2015年4月から実施された子ども・子育て支援新制度以降、特に公立幼稚園においては園児数が激減し、休園・閉園となった園や認定こども園に移行したケースが多く見られること、また、認定こども園はその歴史がまだ浅いことから、今回の分析対象からは除外した。

A県では4市内の163園（公立75園、私立88園）に質問紙を郵送し、85園（公立46園、私立39園）から回答を得た（回収率52%）。B県では4市内の123園（公立39園、私立84園）に質問紙を郵送し、52園（公立15園、私立37園）から回答を得た（回収率42%）。なお、このうち私立1園は設置し

てまだ1年の園であったため、分析から除外し、最終的に51園（公立15園、私立36園）を分析の対象とした。以下では、想像的探険遊びの浸透度の点から、A県を拡大地域、B県を非拡大地域と呼ぶこととする。

質問内容

質問紙では、フェイスシートにおいて調査の趣旨を説明し、調査協力への同意を得た上で、記入者や公私の別、定員数や園児数、職員数など基本属性について尋ねた。その後、想像的探険遊び、クリスマス行事、節分行事の3つに関する以下の質問を行った。なお、想像的探険遊びに関しては、その遊びはあくまでも子どもにおいて空想上の存在の虚構性の認識（つまり、ごっこであるとの認識）が前提とされない状態で展開する遊びのことを指し、単なるごっこ遊びとは異なることを冒頭に明記したうえで、質問を行った。

想像的探険遊び：問1-1。過去3年間における空想上の存在が登場する遊び・活動（クリスマスや節分の行事を除く）の実施の有無〔ある／ない〕。問1-2。実施の頻度〔1回だけある／2回以上ある／毎年必ずある〕。問1-3。遊び・活動の具体的内容（題材、対象、展開過程など）〔自由回答〕。問1-4。空想上の存在の扮装物の出現の有無〔ある／ない／時々ある〕。問1-5。扮装物の出現における工夫・配慮〔自由回答〕。問1-6。保育者による働きかけ・仕掛けの有無〔ある／ない〕。問1-7。働きかけ・仕掛けの具体的内容〔自由回答〕。

クリスマス行事：問2-1。クリスマス行事の実施の有無〔行っている／行っていない〕。問2-2。未実施の理由〔自由回答〕。問2-3。サンタクロースの扮装物の出現の有無〔ある／ない／時々ある〕。問2-4。扮装物の出現における工夫・配慮〔自由回答〕。

節分行事：問3-1。節分行事の実施の有無〔行っている／行っていない〕。問3-2。未実施の理由〔自由回答〕。問3-3。鬼の扮装物の出現

の有無〔ある／ない／時々ある〕。問3-4。扮装物の出現における工夫・配慮〔自由回答〕。

調査実施時期

2019年10月から11月にかけて実施した。

結果と考察

実施の有無とその理由

想像的探険遊び、クリスマス行事、節分行事の地域別の実施状況は、Table 1 に示す通りであった（問1-1、2-1、3-1）。なお、想像的探険遊びについては、単なるごっこ遊びやクリスマス及び節分の行事は除外することを回答の前提条件として明記していたが、いくつかの園では混同が見られ、純粋な想像的探険遊びの実施は「ない」にもかかわらず「ある」と回答しているものが見られた。これらは具体的内容の記述から判断し、「ある」ではなく、「あるnotない」として独立的にコード化した。なお、予備分析を行った結果、園児数の規模による実施状況や実施方法の違いはいずれの遊び・活動や年中行事においても見られなかった。

想像的探険遊び： Table 1 に示すように、想像的探険遊びは全体の27%の園で行われていたが、拡大地域39%に対して非拡大地域8%というように、地域により実施状況の違いが見られた。また、「あるnotない」回答は、拡大地域20%に対して非

拡大地域47%というように、非拡大地域において多く見られた。この非拡大地域における質問の誤解釈の多さは、その地域における想像的探険遊びの浸透不足を表していると考えられる。つまり、想像的探険遊びについての認識がまだ乏しいため、他の似通った現象と混同させて回答する園が多く見られたものと考えられる。このことは、実施頻度（問1-2）について、「毎年必ず」あるいは「（3年間で）2回以上」という回答が拡大地域では97%であったのに対し、非拡大地域では50%であったことからうかがえる。また、拡大地域では、私立よりも公立において多く行われる傾向が見られた（18% vs 57%）。拡大地域では想像的探険遊びが、公立保育園を中心に広まり浸透していることがうかがえる。まとめると、想像的探険遊びは全体としては30%弱の園で実施されているが、地域によって実施状況に違いがあり、加えて、保育雑誌等での実践報告の量は保育現場での実際の浸透度を反映していることが示唆された。

次に、想像的探険遊びが保育の現場で実際にどのように行われているのかについて述べる。実施している園に対して保育者による働きかけ・仕掛けの有無（問1-6）について尋ねたところ、いずれの地域でも1園を除く全ての園が「ある」と回答し、ほとんどの園で空想上の存在の実現可能性を示唆するような何らかの働きかけや仕掛けが

Table 1 想像的探険遊び、クリスマス行事、節分行事の地域別の実施状況

| | | 拡大地域 | | 非拡大地域 | | 合計 | |
|---------|---------|------|-----|-------|-----|-----|-----|
| 想像的探険遊び | ある | 33 | 39% | 4 | 8% | 37 | 27% |
| | あるnotない | 17 | 20% | 24 | 47% | 41 | 30% |
| | ない | 34 | 40% | 23 | 45% | 57 | 42% |
| クリスマス行事 | ある | 83 | 98% | 40 | 78% | 123 | 90% |
| | ない | 2 | 2% | 11 | 22% | 13 | 10% |
| 節分行事 | ある | 72 | 85% | 49 | 96% | 121 | 89% |
| | ない | 13 | 15% | 2 | 4% | 15 | 11% |

注1. 想像的探険遊びに関する拡大地域の回答には「無回答」が1件あった。

注2. 想像的探険遊びに関する拡大地域の「ある」回答には「過去にある」回答が3件含まれた。

行われていることが示された。**Table 2**は、実践の具体的内容（問1-3）と保育者による働きかけ・仕掛けの内容（問1-7）の例を示したものである。きっかけとして最も多く見られたのは絵本の読み聞かせであったが、その他にも、謎めいたものや不審なものとの偶然の出会いや、身近にある何か不思議なものが潜んでいそうな環境、文化的な行事への参加、魅力的な歌や壁面構成のキャラクターとの出会いなど、きっかけは様々であった。子どもたちがその存在に強い関心を示し、自らの想像世界を膨らませていく中で、保育者がふとその存在の実現可能性を唆するような言葉がけをしたり、関連しそうな証拠や痕跡を発見したり、手紙や贈り物が届いてその存在とやりとりをする中で、それらはさらに子どもたちにとって強い実感を持った存在へと変化していくようであった。また、園によっては琵琶法師やねずみばあさんなど、その園固有の伝統・文化として長年にわたって定着している空想上の存在もいた。

クリスマス行事： クリスマス行事は、**Table 1**に示すように、全体の90%の園で行われていた。「行っていない」という回答は、拡大地域2%に対して、非拡大地域22%と比較的多く観測された。しかし、その大部分（11園のうち10園）は私立であり、理由（問2-2）としては、「仏教園なので、お釈迦様のご誕生をお祝いする行事はするが、キリスト様のお祝いはいらない」「宗教心のない宗教行事を強要することに抵抗がある」など、宗教上の理由が多く見られた。

節分行事： 節分行事もまた、**Table 1**に示すように、全体の89%の園で行われていた。「行っていない」という回答は、非拡大地域4%に対して、拡大地域15%と比較的多く観測された。しかし、その全て（13園）が公立であり、理由（問3-2）としては、「鬼を悪者と決めつけることは人権保育上していない。絵本などを用いていろいろな鬼の話や大豆の栄養などについては話をしている」「鬼を悪いものたとして豆をぶつけるという行為は決めつけにつながるなどの考えから、

実施していない。園では福豆を食べたり、季節の分かれ目であるということは絵本を使って知らせている」など、春の訪れを祝う、食べ物を大切にするという観点の行事は行っているが、鬼を悪者として位置づけ追い払うということは、人権の観点から偏見につながる恐れがあるため行っていないという理由が多く見られた。

扮装物の出現の有無とその工夫・配慮

想像的探険遊び、クリスマス行事、節分行事における地域別の扮装物の出現状況は、**Table 3**に示す通りであった（問1-4、2-3、3-3）。

想像的探険遊び： 全体で見ると、想像的探険遊びではあまり出現しておらず、実施している園のうち57%が扮装物の出現は「ない」と回答した。「ある」は11%、「時々ある」は31%に過ぎなかった。これは後述するサンタクロースと節分の鬼の扮装物の出現が、「ある」と「時々ある」を合わせてそれぞれ91%と82%もあったのに比べて対照的である。なお、非拡大地域での実施自体が4園のみと非常に少なかったため、地域間の違いは確認できなかった。

想像的探険遊びにおいて、このように扮装物の出現が少なかったのはなぜなのであろうか。考えられる理由の1つとして、扮装するための衣装や仮面等の準備の困難さが挙げられる。クリスマスや節分は1年に1度必ず訪れる行事であるため、衣装や仮面等も豊富に市販されており、入手しやすく、園としても毎年使用するものとして購入済みである場合が多い。他方、想像的探険遊びの場合には、子どもが特定の空想上の存在に対して強い関心を持ち、それを遊びや活動へと発展させるという実践自体が、そもそも毎年行われるものではなく、仮に行われたとしても園固有の伝統・文化が育っていない限り、空想上の存在は年ごとに種類が異なり、存在によっては扮装そのものが不可能な場合もあるだろう。ゆえに、扮装に必要な衣装や仮面等の準備は困難であると考えられる。

また、もう1つの考えられる理由として、子ど

Table 2 想像的探険遊びの具体的内容と保育者による働きかけ・仕掛け

| No. | 題材 | 年齢 | 具体的内容／働きかけ・仕掛け等 |
|-----|-----------------|-----------|---|
| 1 | 魔女 | 不特定 | 園庭で見つけた謎の植物、園外保育で見つけた竹ぼうき、不思議な立て看板などから想像を膨らませ、魔女の存在が…。発表会の劇遊びへとつながった。／子どもたちの目につきやすいところに上空上の存在が残っていた形跡と分かるようなものを仕掛けておく。事前に家庭と連携して、家族や身近な存在の人に確かめさせる。 |
| 2 | 忍者、やまんば、天狗、琵琶法師 | 不特定 | 毎年クラスの中で忍者ややまんばが存在する。クラスの子どもの発想の中から展開していくので、年によって違うが、昨年は天狗、今年4歳はやまんばだった。近くに山があり、その山で話は広がる。園全体をあげてでは、琵琶法師が25年続いて園に存在しており、子どもたちの守り神のようにになっている。それがすべての保育行事にもつながっている。／生活の節目でその存在が話しかけたりする時がある。また、手紙が来て、それがきっかけで展開していく。 |
| 3 | かっぱ | 5歳児 | 5歳児。『でた！かっぱおやじ』の絵本の読み聞かせを集中して聞き入っていたことから始まる。子どもたちの「いたらどうしよう」や「友だちになりたいね」といったドキドキワクワク感の発信があり、近くの公園にかっぱを探しに行ったり、手紙でのやりとりを楽しんだりした。／「子どもたち一人ひとりの頑張っている姿、勇気、優しさをいつまでも見守っている」といった内容の手紙をかっぱからもらう（かっぱは空想とし、登場はせず、手紙でのやり取りを行う。担任の育てたいことがそこに詰まっている）。 |
| 4 | ばけたくん、探偵、宇宙人 | 3, 4, 5歳児 | 3歳…『ばけたくん』の絵本から、夏祭りの神輿作りやお店屋さんごっこ、体操などに発展。4歳…探偵（実際にいるが、空想上とした）。子どもたちの中にある「名探偵」とのやりとり（手紙、プレゼント等）を楽しみ、探偵ごっこや劇遊びを行った。5歳…宇宙に興味があり、宇宙人がいたら…と想像がふくらんできたので、絵本を描いたり、迷路遊びに取り入れ、宇宙人との対話（TV電話）をして楽しんだ。／クラス担任だけでなく、職員室も協力し、手紙が届くようにしたり、公園や神社へ事前にしかけをする。 |
| 5 | 怪盗U | 5歳児 | 5歳児対象。『おしりたんてい』に出てくる怪盗Uから届く挑戦状をもとに、子どもたちと一緒に謎解きをして楽しんだ。謎を解いたら運動会や発表会に向けての応援メッセージになったり、プレゼントが見つかったりなど。／子どもたちが保育室にいない間に、子どもたちの使っている物を隠したり、黒板や窓に手紙を貼ったりした。保育室に戻ってきた時に、子どもたちが部屋の異変に気づけるようにした。「先生がしたんやろ～」と言われても、「ずっとみんなと一緒にいたでしょう？」と言って、「怪盗Uが本当にいたのかも…」と思わせるようにした。「保育園に手紙が届いたよ～」と他の職員に届けてもらったりした。 |
| 6 | ねずみばあさん | 5歳児 | 年長組が毎年7月に夕方までの保育をする際、絵本『おしいれのぼうけん』をもとに園の倉庫に冒険しに行き、ねずみばあさんに勇気のカードをもらうという毎年の取り組み。／倉庫内の環境を毎年工夫する。擬音、明るさ、設定物など。 |
| 7 | 織姫と彦星、十五夜のウサギ | 5歳児 | 七夕に向けて笹に飾る願いごとを「受け取った」という想定で、七夕の翌日に飾りや短冊のなくなった笹に織姫と彦星の手紙が添えられている、ということを経験できるようにしている。また、今年は十五夜にお月見団子を作り、十五夜の翌朝にかじられた後を子どもたちが見つけられるように仕向け、空想を楽しませた。／手紙や痕跡を演出している。 |
| 8 | ゴンちゃん | 3～5歳児 | ゴンちゃん。3歳児クラスの時のクラス全員の友達、仲間としての存在。当初は運動会の曲に登場したお話の中での存在であったが、生活発表会の中で「ゴンちゃんを笑顔にする」というお話になり、「ゴンちゃんを助けたい」という思いが強く、存在そのものを自然に信じるようになった。普段も壁面の中にずっと存在していたが、進級時、転園することになったということでお別れをした。当時の子どもも今では年長児になったが、先日「ゴンちゃんどうしとるかな？」と言うので、「みんなと一緒に1年生になるよ」と言ったら、「ランドセル何色かな？」と普通に会話をし、今も信じているようである。／壁面の中のゴンちゃん表情を朝は泣き顔、夕方は笑顔に変え、みんなと一緒に過ごすことで楽しくて笑顔になるという設定にした。 |
| 9 | こびと | 2～5歳児 | 2～5歳児…『こびとづかん』の本に出てくる「こびとさがし」。時々子どもたちから「探しに行こう」と声があり、本を片手に探検(?)に出かけるという遊びが数回発生した（保育士側からの働きかけではなく、本を見ている子どもたちから発生している）。／「あっちの方でこびとが脱皮した皮を見た人がいるらしい」とか、「影を見た子がいるらしいよ」「一緒にさがしにいってみようか」など。 |
| 10 | 忍者 | 3, 4, 5歳児 | 忍者山という山があり、その上に忍者が住んでいるという仮説を立てている。3, 4, 5歳児クラスを対象に、子どもたちの日々の遊びの楽しかった様子を忍様に伝えたり、新しい遊びを紹介したりする内容の手紙が忍様から届く。／手紙は事務所の職員が作成し、各クラスの遊びや子どもたちの年齢を越えたつながりをつくる機会へと結び付けていく。空想上の存在（実物）が子どもたちだけしか知らないことを手紙に書いて届けるなどするしかけ。 |

Table 3 想像的探険遊び、クリスマス行事、節分行事における地域別の扮装物の出現状況

| | | 拡大地域 | | 非拡大地域 | | 合計 | |
|---------|------|------|-----|-------|------|-----|-----|
| 想像的探険遊び | ある | 5 | 15% | 0 | 0% | 4 | 11% |
| | 時々ある | 9 | 27% | 2 | 50% | 11 | 31% |
| | ない | 19 | 58% | 2 | 50% | 20 | 57% |
| クリスマス行事 | ある | 69 | 83% | 39 | 100% | 108 | 89% |
| | 時々ある | 3 | 4% | 0 | 0% | 3 | 2% |
| | ない | 11 | 13% | 0 | 0% | 11 | 9% |
| 節分行事 | ある | 47 | 65% | 48 | 100% | 95 | 79% |
| | 時々ある | 4 | 6% | 0 | 0% | 4 | 3% |
| | ない | 21 | 29% | 0 | 0% | 21 | 18% |

注. 回答の対象は実施園のみであった。

も独自の想像世界を大切にすることで、あえて扮装物は出現させないという考え方が挙げられる。想像的探険遊びに登場する空想上の存在は、それ自身が絵本や童話の物語から着想を得ながらも、子どもと保育者とが身近な環境とかかわる中で独自に生み出した存在である場合が多い。ゆえに、その空想上の存在のイメージ（心像）は一般的によく知られた物語のそれに沿いながらも、詳細な部分では子ども一人ひとりが独自に紡ぎ出したイメージによって成立していることが多いのである。よって、仮に保育者自身が思い描くイメージに従って空想上の存在の扮装物をつくり出し、子どもの前に提示すると、子ども一人ひとりのイメージとの間に乖離が生じ、彼らの想像世界を損なう可能性が十分に考えられる。実際、扮装物を出現させる場合に大切にしている点などを尋ねたところ（問1-5）、保育者からは、できるだけイメージを忠実に再現し（例：「できるだけイメージを壊さないようにする」「子どもたちのイメージを崩さないように」）、どの職員が扮装しているかわからないように注意し（例：「職員であることがわからないようにする」「写真に残さないこと」）、遠くの場所からほんの一瞬だけ見えるなどの工夫や配慮をする（例：「姿を現すのは一瞬。また距離をとる」「ふれ合う距離や時間などを工夫」）ことが示された。

クリスマス行事： サンタクロースの扮装物は、Table 3に示すように、全体の91%の園で出現していた。また、地域による違いに目を向けると、扮装物の出現が「ない」と回答した園は非拡大地域0%に対し、拡大地域13%というように比較的多く見られた。つまり、非拡大地域では出現させる方向で意見が一致していたのに対して、拡大地域では意見が分かれていた。拡大地域におけるこうした意見の多様性は、想像的探険遊びの浸透に見られるように、大人による扮装物の出現が子どもの想像力に及ぼし得るリスクについて、より深く慎重に議論されていることの表れではないかと考えられる。

サンタクロースの扮装物の出現における工夫や配慮（問2-4）については、Table 4に示すように、目標と方法という点でまとめられた。目標の1つは、「イメージを壊さないようにする」ことであり、方法は様々に見られたが、扮装物をいかに本物のように見せかけ、子どもたちに本物であると信じさせるかに重点が置かれているという点で共通していた。もう1つの目標は、「怖がらせないようにする」ことであり、これは先述とは逆に、方法としては、扮装物をいかに本物ではなく身近な存在に見せかけるか、あるいは、扮装物からいかに子どもの注意を逸らすかに重点が置かれていた。これらは扮装物を本物（リアル）によ

り近づけるか（本物志向）、あるいは本物からより遠ざけるか（非本物志向）という点で、興味深い対照であると言える。

この対照的な見解が保育の現場においてどのようなバランスで成立しているかを探るために、それぞれの特徴的なフレーズの出現率を比較することとした。本物志向型の特徴的なフレーズは、「分からない（気づかれない、バレない、知られない）ように、夢（イメージ、想像）を壊さない（否定しない、持てる）ように、本物であるかの（に近づける）ように」などであり、非本物志向型の特徴的なフレーズは「怖がらせ（過ぎ）ないように、恐怖心（トラウマ）を持たせ（過ぎ）ないように、怖さを和らげる（半減できる）ように」

などであった。何らかの記述が見られた94園について、概ねこうしたフレーズの記述が見られたかどうかによって分類したところ、非本物志向型は4園（4％）に過ぎなかったのに対し、本物志向型は58園（62％）も確認された（その他32園、34％）。このことから、サンタクロースの衣装物の出現に関しては、多くの園が本物により近づけるべきであると考えていることが示された。このことは同時に、保育者は子どもたちに「衣装物＝本物」と信じてほしいと願っていることを示唆していると言える。

節分行事： 節分の鬼の衣装物もまた、Table 3に示すように、全体の83％の園で出現していた。また、地域による違いに関しては、サンタクロ

Table 4 サンタクロースの衣装物の出現における工夫・配慮

| 目標 | 方法 | 記述例 |
|----------------|----------------|--|
| イメージを壊さないようにする | 衣装を徹底する | 「衣装を身に着ける場合、頭からつま先まで保育士と分からないよう衣装する」「髪の毛、眉毛、顔の輪郭、服（ジャージの裾）、上靴等が少しでも見えていると子どもたちは保育士と気づいてしまうので、しっかりと衣装に隠す」 |
| | 役になりきる | 「サンタのイメージができるような姿勢や歩き方などに気をつけている」「登場、退場ともにその前後が厳かになるように、姿、言葉ともに本物らしく振舞ってもらう」 |
| | 声を出さない | 「声も出すと分かってしまうので、身振り手振りのみとする」「質問コーナー等では声を出さず、保育士が耳で聞き、代弁して答えるようにしている」 |
| | 外部の人に役をお願いする | 「園児の知らない第三者が演じる」「保育園にほとんど来園したことがない方にサンタクロースをお願いしている」 |
| | 本物らしい人に役をお願いする | 「外国人（英語）の先生に衣装を着て登場してもらう。英語で話してもらう」「地域の本のおじさんをお願いしてある（毎年、楽しみにしてもらっている）」 |
| | 出入りや着替えを見られない | 「出入りする姿を見せないようにする」「園児の見えないところで準備や着替えを行う」 |
| | 遠くから来たように演出する | 「園庭に大きめの氷をたくさん用意し、ソリで通った道を作っておく」「登場はテラスから行い、外から来たように感じられるようにしている」 |
| | 相応しい雰囲気づくりをする | 「楽しいイメージ作りをするため、音楽や光の演出に心がけている」「サンタさんの登場にあわせて鈴の音、雪の上を歩いている音を流すようにしている」 |
| | 照明を暗くする | 「クリスマス会の会場を少し暗くして、衣装の中の人が見えないようにする」「変装がばれないように部屋を暗くする」 |
| | 事前にやりとりする | 「子どもたちがクリスマスに期待が持てるようイメージをふくらませ、子どもとの会話や当日までの準備などを楽しめるようにしている」「事前にサンタクロースから手紙が届き、当日まで期待や夢を持てるようにする」 |
| 怖がらせないようにする | 楽しい雰囲気にする | 「怖がる子もいるので楽しい雰囲気になるよう心がけている」「恐怖心が残らないよう、一緒に給食を食べたり、クリスマスパーティーに参加するようにしている」 |
| | 衣装を分かりやすくする | 「小さいクラスには怖がらせないように、先生だと分かるように顔が見えるように」 |

スの場合と同様に、扮装物の出現が「ない」と回答した園は非拡大地域0%に対し、拡大地域29%というように比較的多く見られた。このことは先述のサンタクロースの場合と同様に、拡大地域では非拡大地域と比べて、大人による扮装物の出現が子どもの想像力に及ぼし得るリスクについて、より深く慎重に議論されているためと考えられる。

節分の鬼の扮装物の出現における工夫や配慮(問3-4)もまた、Table 5に示すように、目標と方法という点でまとめられた。目標の1つは、「本気で取り組めるようにする」ことであり、その方法はサンタクロースの場合と同様に、扮装物

をいかに本物のように見せかけ、子どもたちに本物であると信じさせるかに重点が置かれていた。もう1つの目標は、「怖がらせないようにする」ことであり、これも先述のサンタクロースの場合と同様であった。本物志向か非本物志向かという点で、何らかの記述が見られた81園を分類したところ、本物志向型は10園(12%)、非本物志向型は32園(40%)であり、また、両意見が含まれる混合型は2園(2%)というように、サンタクロースの場合とは逆の結果が得られた(その他37園、26%)。このことから、鬼の扮装物を子どもの前に出現させる場合、サンタクロースとは異なり、

Table 5 節分の鬼の扮装物の出現における工夫・配慮

| 目標 | 方法 | 記述例 |
|---------------|--|---|
| 本気で取り組めるようにする | 役になりきる | 「本気で子どもたちを怖がらせている」「本物の鬼が来たと思わせるよう、鬼の衣装をつけた保育者がニセの金棒を大げさに振り回しながら各部屋を回る」 |
| | 扮装を徹底する | 「すべて手作り。鬼の顔も手作りだが手抜きはしないし、結構リアル」「扮装するときは全身を隠し、肌や髪を見せないようにする」 |
| | 声を出さない | 「言葉は発しない」「声は事前に声色を変えて吹き込んだテープを流す」 |
| | 出入りや着替えを見られない | 「鬼役になった人は朝から子どもたちの前に姿を見せず、お休みのような雰囲気を出しておく」「登場まで子どもたちの目に触れないように、着替えや移動に細心の注意を払う」 |
| 事前にやりとりする | 「勇気をもって立ち向かえるように事前にいろいろなアイテムの製作をする」「事前に鬼からの手紙が届き、年長児が鬼との出会いの中でどう関わるのか話し合っている」 | |
| 怖がらせないようにする | 扮装を分かりやすくする | 「保育者の姿が分かるようにお面だけやツノだけをつける」「リアルにならない。先生が演じているのが分かるように」「先生が扮していると分かる程度に扮装している」 |
| | 怖いイメージ以外の側面を示す | 「鬼を「病気鬼、いじわる鬼、弱虫鬼」などに喩えて、怖さを半減できるように」「扮装している者があえておどけてみたり、優しさも出して、少しでも怖さを和らげられるように気を付けている」 |
| | あまり近づかない | 「遠巻きに出るようにしている」「鬼が入って来れないようゾーンを作ったりしている」 |
| 楽しい雰囲気にする | 「怖がらせるのではなく一緒にゲームをしたり踊りを楽しむなどしている」「恐怖心だけが残らないよう、豆まき終了後は鬼とのふれあいの場をもち、最後はバイバイができるようにしている」 | |
| 過度な演出を控える | 「過剰な演技は控え、恐怖心を植えつけないようにする」「怖すぎる鬼にならないようにする」 | |
| 短時間で終わらせる | 「なるべく短時間で終わるようにする」「怖がるので短い時間で終える」 | |
| 幸せな結末にする | 「優しい鬼であることを印象づけて終わるようにしている」「最後は鬼さんと仲良くなり握手して別れる」 | |
| 節分の本来の意味を強調する | 「節分の鬼の存在は決して怖いものではないという紙芝居や絵本を読み聞かせたり、工夫をして行事に向かっている」「しっかり節分について話をして鬼さんは怖くないのよと話しかけるようにしている」 | |

多くの園で本物からより遠ざけるべきであるという考えが働いていることが示された。このことは、保育者は子どもたちに「扮装物＝本物」と信じてほしいと思っているわけではないことを示唆している。

以上のように、年中行事で子どもたちが出会う空想上の存在という点で共通しているサンタクロースと節分の鬼ではあるが、その出会いの場を演出する際の保育者の基本的な考え方や態度は異なっていることが示された。これは興味深い事実であるが、その違いには当然のことながら、両空想上の存在が子どもに誘発させる感情の違いが反映されているものと思われる。サンタクロースは主に喜び・楽しさなどポジティブな感情を誘発させるのに対して、節分の鬼は主に恐怖・不安などネガティブな感情を誘発させる。サンタクロースはより本物に近づけるほど、子どもの中でポジティブ感情を増幅させるが、節分の鬼はより本物に近づけるほど、子どもの中でネガティブ感情を増幅させるリスクがある。こうした違いが、鬼の扮装物の本物志向を遠ざけた要因であると思われる。

一方で、子どものネガティブ感情を誘発させ増幅させるリスクがあると認識したうえで、それでも鬼を本物志向で出現させるという園も見られた。そこには、子どもに鬼という現実的または想像的な脅威と向き合わせながらも、同時に子ども自身の内面の弱さや課題とも向き合わせ、それを乗り越えさせることで、子どもに自信をつけさせたいという保育者の願いや考えが背景にあった。つまり、節分行事のある種の通過儀礼としながら、子どもの成長を後押ししようというものであった。

加えて、鬼の扮装物を本物志向から遠ざける場合でも、それは単に子どものネガティブ感情を誘発させ増幅させるリスクを避けるという理由のみならず、あえて「鬼＝怖い」というイメージから遠ざけることで、鬼は悪者であるという固定観念を植え付けられないようにするといった人権教育上の配慮によるものも多く見られた。その場合は、優

しい鬼やおどけた鬼なども登場させることで子どもにも多様なイメージを持たせたり、最終的には仲良くなるという結末のストーリーを用意したりすることで、子どもの中の鬼に対する固定的なイメージを変化させていた。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、保育の現場において空想上の存在が登場する遊び・活動（想像的探険遊び）や年中行事（クリスマス、節分）がどの程度行われ、どのような工夫・配慮のもと、どのように展開されているかを探ることであった。具体的には、富田（2018）をもとに、想像的探険遊びの実践報告が多い地域（拡大地域85園）と少ない地域（非拡大地域51園）を対象に、その実施状況と方法に関する質問紙調査を行った。

主な結果は以下のようにまとめることができる。

- (1) 想像的探険遊びは全体で27%の園で実施されていたが、拡大地域(39%)では非拡大地域(8%)と比較して多く実施されていた。保育雑誌等での実践報告の量は、保育現場での実際の浸透度を反映していると考えられる。
- (2) クリスマス行事や節分行事はほとんどの園で実施されており、実施されない場合は、宗教上の理由か教育上の理由によるものであった。
- (3) 想像的探険遊びでは、そこで生成された空想上の存在が大人による扮装物として子どもたちの前に出現することは少なかったが、クリスマスや節分では大人が扮装したサンタクロースや鬼がほとんどの園で出現していた。
- (4) サンタクロースの扮装物の出現においては、多くの園でそのイメージを壊さないように、扮装物をより本物に近づける工夫・配慮がなされていた。他方、節分の鬼の扮装物の出現においては、子どもに過度な恐怖や不安を与えることを避けるために、むしろ本物からより遠ざける工夫・配慮がなされていた。また、そこには「鬼＝怖い・悪者」というイメージを避けるという狙いもあった。

実際のところ、全体で27%の園が想像的探険遊びを最近3年以内に実施したことがあるという本

研究の結果は、決して小さい割合ではないであろう。空想上の存在があたかも本当にいるかのように信じて展開する想像的探険遊びが、保育の現場において確かに根付いていることがうかがえる結果である。一方で、いわゆる非拡大地域では、その割合はほんの8%に過ぎなかったことから、今後もその遊びの意義や楽しみ方を様々な媒体を通じて伝えていくことは必要であるに違いない。この種の遊びについては、これまでも一部で否定的な意見も報告されてきたが（河崎、1990；加用、1993を参照）、本研究の自由記述の中では、過度に怖がらせたり驚かせたりしないよう配慮しながらも、想像した空想上の存在の不思議さや謎に対してどの子どもも夢中になり、その話題で大いに盛り上がり、卒園後も顔を合わせればその話で盛り上がるといった姿が報告された。空想上の存在との出会い体験は、それが驚異的で神秘的で謎めいた存在であるがゆえに、子どもの興味・関心を引き付け、その存在を含む身近な世界に対する想像力や好奇心・探究心を掻き立てるものと思われる。今後は保育現場での取り組みを家庭に伝えていくとともに、家庭でのその種の遊び・活動の実態を探ることも課題であると言えよう。

また、クリスマス行事と節分行事に関しては、宗教上または教育上の理由を示したほんのいくつかの園を除いて、ほとんどの園で実施されており、その多くの園で空想上の存在（サンタクロースと鬼）の扮装物が出現していた。特に本研究では、子どもの前に扮装物を出現させるにあたって、保育者はどのような目標のもと、どのような方法による工夫や配慮を行っているかを明らかにした点が重要であろう。ポジティブな感情を誘発させるサンタクロースとネガティブな感情を誘発させる鬼とでは、その実践上の目標や方法が異なっていたが、特に後者に関しては、場合によっては子どもを恐怖の淵に突き落とすリスクが伴うため、扮装物を本物により近づけるか、あるいは本物からより遠ざけるかに関しては、幾分意見が分かっていた。今後は、恐ろしい鬼と出会うという節分行

事の意味を改めて問い直しながら、その実践の在り方を保育現場と協働で考えていく必要があるだろう。また、クリスマスや節分の行事が多くのお家庭において祝われているという実態を考えると、今後は家庭内での取り組みについてもより詳細なデータを得ながら、子どもの想像力や好奇心・探究心への貢献を実証的に検討していくことが求められるだろう。

文 献

- Anderson, C. J., & Prentice, N.M.: Encounter with reality: children's reactions on discovering the Santa Claus myth. *Child Psychiatry and Human Development*, 25(2), 1994, 67-84.
- Clark, C. D.: *Flights of Fancy, Leaps of Faith: Children's Myths in Contemporary America*. Chicago: The University of Chicago Press, 1995.
- 藤野友紀「遊びの心理学：幼児期の保育課題」石黒広昭編『保育心理学の基底』萌文書林, 2008年, 116-148頁。
- Goldstein, T. R. & Woolley, J. D.: Ho! Ho! Who? Parent promotion of belief and live encounters with Santa Claus. *Cognitive Development*, 39, 2016, 113-127.
- Harris, P. L.: *The work of the imagination*. Malden, MA: Blackwell, 2000.
- 岩附啓子・河崎道夫『エルマーになった子どもたち』ひとなる書房, 1987年
- 河崎道夫「探険遊びにおける想像の発達について」『保育実践研究（三重大学教育学部）』, 第2号, 1990年, 1-9頁。
- 加用文男「遊び研究の方法論としての「心理状態主義」」『発達』, 第55号, 1993年, 1-16頁。
- Prentice, N. M., Manosevitz, M., & Hubbs, L.: Imaginary figures of early childhood: Santa Claus, Easter Bunny, and the Tooth Fairy. *American Journal of Orthopsychia-*

try, 48, 1978, 618-628.

富田昌平「子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのか? : 大学生による回想報告をもとに」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』, 第65巻, 2014年, 161-170頁.

富田昌平「保育における想像的探険遊びの展開: エルマー実践から30年の節目を超えて」『心理科学』, 第39巻第2号, 2018年, 74-89頁.

山田直史・橋本萌衣「女子高生における行事と行事装飾及び行事食の結びつき」『日本調理科学会大会研究発表要旨集』, 31巻, 2019年, 14頁.

付 記

本研究は平成29年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号:17K04351)の助成を受けた。